

「幸せの国」の農業振興と観光開発

「世界一幸せな国」として、世界から関心が寄せられるブータン。日本は梅雨の真ただ中の6月、ヒマラヤ山脈を眼下に見下ろしながら、この国に降り立ったのはファッションモデルの押切もえさん。環境省が推進する「チャレンジ25キャンペーン」※1に参加した経験もある押切さんは、「環境は地球全体の問題。世界の人々がどのような現実で直面しているのか知りたい」と考えていた。そして今回、その思いがかなって「なんとかしなきゃ！プロジェクト」※2の著名人メンバーとしてブータンへの訪問が実現した。

1. ブータンの農業振興、農業機械化推進の拠点となっている施設で、日本も1960年代から支援を続けている。60年代にこの国に農業分野の専門家として派遣され、このセンター設立の礎を築いた日本人がいる。ブータンで外国人唯一の爵位「ダシヨ」を贈られた西岡京治さん。28年間にわたりブータンの農業振興に身をささげ、亡くなって20年経った今でも、ダシヨ「西岡」として地元の人々の記憶に深く刻まれている。この日、西岡さんから指導を受けたという、元センター所長のジャンベイ・ドルジさんに会うことができた。「私たちはダシヨ「西岡」から換金作物の栽培方法を学び、農家の生計向上につなげることができました」と懐かしそうに話してくれた。ブータンの農業の父と慕



特別レポート

文=登坂宗太(JICA広報室)
写真=丸山涼子(face to face)

押切もえさん
幸せの先に見えるもの
inブータン

女性ファッション誌「AneCan」などでファッションモデルとして活躍する押切もえさん。今年6月、幸せの国ブータンで日本との間で築き上げられた「ぎずな」を見つけた。



[上]ダシヨ「西岡」の功績を称えて建立された仏塔の前で
[下]ドルジ元所長に農業にかける熱い思いについて聞いた

われてきた西岡さんの話を聞いた押切さんは、「日本人の大先輩がブータンと日本の懸け橋となってきたんですね」と感動していた。その後、世界でも珍しいオグロツルの飛来地として有名なボブジカへ。急しゅんな山岳地帯が国土の大半を覆っているため、首都ティンブーから直線距離で50キロのボブジカまで7時間もかかってしまった。



押切さんもブータンの民族衣装の機織りに挑戦。「一本一本の糸に情熱が込められているんですね」

ここで活動するのが、公益社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF)。JICA草の根技術協力事業を通じて、地元NGOと協働で地域資源を活用した観光開発に取り組んでいる。「政府は観光を主要産業の一つとし、外国人観光客の増加を推進しています。でもボブジカのような小さな村は観光資源も少なく、地元にお金が落ちる仕組みがありませんでした」とプロジェクトマネージャーの田儀耕司さんは話す。そこで田儀さんたちが注目したのがこの土地に伝わる伝統衣装。「機織り体験を通じて観光客との交流を促進し、村が活性化するきっかけができれば」と熱く語ってくれた。田儀さんの案内で、現地の男性が身につける伝統衣装「ゴ」を織る様子を視察した押切さん。「日本では着物を着る機会が減っています。日常的に伝統衣装を着る文化が残っているのは素晴らしいですね」と感想を話していた。

ブータンで見つけた日本とのぎずな
続いて、日本の支援で建設されたボブジカ小中学校へ。授業中、流ちょうな英



子どもたちに日本とブータンの「ぎずな」について説明する押切さん

語で発表する子どもたちに押切さんは驚いていた。「小さいころから英語を学んでいれば、世界中の人たちとコミュニケーションが取れるようになる。世界が広がりますよね」とリーラ・バハドゥー・タラ校長は説明してくれた。押切さんから子どもたちへのプレゼントは「ぎずな」をテーマにした授業。東日本大震災後、ブータンのワンチュク国王・王妃両陛下の被災地訪問を通じて生まれた「ぎずな」が、東北の人々の大きな支えになったことを伝えた。「人と人とが支え合う「ぎずな」を大切にしたい」。聞き慣れない言葉聞き、手元にノートがなかったのか、手に「KIZUNA」とメモを取っている子もいた。ボブジカから首都に戻った押切さんを待っていたのは、ワンチュク国王・王妃



ボブジカ小中学校の生徒たち。「シャイだけど、みんななつこくてパワフル。将来の夢をきちんと持っているのは素晴らしいですね」と押切さん



ワンチュク国王・王妃両陛下、仁田知樹JICAブータン事務所長と。両陛下が京都で購入されたソルとカメの置物についてなど日本文化の話に花が咲いた

「ブータンの首都は都市化の影響もあり、人々がお互いを敬い、支え合う精神が薄れてきている。でも私は、その精神こそ、守っていかなければならないと考えているのです」と国王陛下。「お互いを支え、敬うという文化を尊重するあなたたち日本人を愛している」と温かい言葉を押切さんはいいただいた。初めて訪れたブータンを「幸せの先には、人と人との「ぎずな」がありました」と押切さんは表現する。「私ももっと勉強して、自分ができることを探していきたい」。ファッションモデルなどの仕事を通じて、これからの皆さんの世界との「ぎずな」を生み出してくれるに違いない。

※1地球温暖化防止に向けて、温室効果ガス排出量の25%削減を達成するために具体的な行動を日本国内に普及していく活動。
※2途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。